

創価学会の真の国際化に向けて

ハワード・ハンター

荒木正純 訳

1

俗人の運動団体である創価学会は、日蓮正宗総本山とこれまで絆を保っていた。ところがこの絆が切れ、学会はそこから離されることになった。本山は、財産はいうに及ばず、日蓮大聖人の仏法哲理と実践に対して、自分たちだけに権利があると主張していた。この分離にともない、創価学会は途方もない難題に直面し、きわめて不可避的な機会がもたらされることになった。学会は、この未知の未来に直面し、自らに適切な反応は何であるか

を、決めなくてはならなかった。人はこう想定してよいかもしれない。つまり選択肢の中に、この俗人の運動団体を解散し、僧侶集団とその指導者たちに忠誠を表明する立場があったらうということ。だがこれは、明らかに不可能であった。それは、基本的な宗学的・構造的疎外が、深刻であったからだ。そしてこの疎外は、破門命令で頂点に達していた。これとははるかに異なる選択は、今や創価学会に、自らの使命をめぐる新しい理解を、自らに表現する自由——実際に明らかな必然性——が与えられた、そう認識する立場であった。

組織内部に、まさに次のようなタイプの指導者たちがいたことは、創価学会にとって幸運であった。つまりこの指導者たちは、国のアイデンティティを保持しつつも、同時にそれを超越する、普遍的な人道主義的運動団体という世界規模の考え方を有する人々であった。彼らの考えでは、この運動団体は、その現れ方として宗教的であり、その理論的根拠は哲学的であり、平和・教育・文化を達成する手段を推進する姿勢は行動主義的でありえる、という。わたしがはじめて創価学会に出会ったのは、学会がアメリカ日蓮正宗として知られていた時分のことである。そのとき以来わたしは、創価学会の教義と活動を次第に知るようになった。こうした者としてわたしは、真に国際的な宗教運動団体として確立していくのに、創価学会がいかに発展していくか、それに興味を抱いていた。したがって、短期間の休暇を所属する大学からもらい、その期間内で調査をする機会に恵まれたとき、わたしは、自分の目で、いかに創価学会が、実際に、創価学会インタナショナル(SGI)になろうとしているかを見たいと思った。SGIの季刊誌に連載したきわめて短

い記事の中でわたしが報告したように、インド、イングランド、メキシコ、イタリアにあるSGIのセンターで、わたしは個人と集団に対してインタビューを行った。わたしは、意義深いほどに多様な社会にいるSGIの会員と指導者に出会った。その出会いは、たいへん限られたものではあったが、強烈であった。ここに提示する所見はその出会いに関わるものである。さらにわたしには、幾度かの機会に恵まれ、日本と合衆国で、SGIがいかなる活動をしているかを知ることになった。わたしは、SGI内部で出会った個々の会員と指導者たちを称賛するようになっていったが、これはまずはじめに述べておくべきことである。もともと、わたしはSGIの会員ではなく、友人のままである。

今日のSGIに対して信頼すべき評価を下そうとするなら、もっと多くのSGIの共同体においてもっと広範にわたる経験を行うことが求められるが、それだけでなく、広大に拡げられた調査基盤も必要となろう。この論文が掲載されるのは、尊敬を集めている学術誌であるが、この論文は、わたしの必然的な限界をもった経験を記述

したものにすぎない。わたしの調査には、途方もなく限界のあることは認める。そうではあっても、依然として明らかなことは、SGIをめぐる情報が一般大衆の間に欠如し、しばしばメディアから誤った情報が流されるのを目の当たりにすると、広範に異なった国のSGIの会員と集団と実際に会って経験したことを、友好的に、しかも偏見をもたずに説明することは、かなり価値のあることだということだ。こうした経験に基づいているわたしは、自分の同時発生のいくつかの結論を要約し、それと同時に将来も似たような調査が可能であろうという希望を述べることができるのである。

2

わたしは目下の試案として、SGIのインターナショナル主義に関して結論をいくつか出している。しかしまずはじめに、その結論に至ったさまざまな経験を概観するよりも、わたしは、読者にふたつの出来事をお知らせし、共通の情報としたい。この出来事とは、自分の行う企てがどのような価値をもつかをめぐるわたしの見解

に、影響を与えたものだ。いくつかの異なった国で、SGIの行っている努力を直接吟味することはやりがいのあることだ、そうわたしは考えたが、その一方でそれは、とくに切迫したものではないと考えた。わたしの心を変えるきっかけとなった最初の出来事は、ボンベイにあるその土地の商工会議所の議長宅で起きた。この人物は著名な実業家で、彼の息子はわたしの大学に在籍している。わたしは何故ボンベイに来たかを語った。そしてわたしが、いくつかのSGIのセンターを訪問しようとしているというと、彼はわたしのために一冊の『タイム』誌国際版を調達してくれた。この雑誌の冒頭の記事は、日本の創価学会を扱い、SGIの池田会長を日本でいちばん重要な人物と呼んでいた。その記事はよくいつて両面価値的に、わるくいえば下品に、SGIとその指導者を描き出し、それを伝えていた。そこで引き合いに出されていたのは、極端に否定的な情報源であり、実例をあげて、日本の創価学会の歴史の中での、厄介なエピソードとして紹介していることの説明をしていた。そこでは、創価学会の政治的運動団体である公明党が強調され、過去と

現在の日本の政治において、公明党がいかなる役割を果たしているかが語られていた。わたしが合衆国と日本でSGIと関わりをもつて経験したこと、そしてインドのSGIの会員と出会ったわたしが自分で知りつつあったこと、このことと日本における創価学会の問題含みの側面をめぐりわたしが読んでいる記事内容とを、比較せざるをえなかった。わたしはこうわかりはじめた。つまり、わたしの行った地味なインタヴューがもし報告されれば、それによって、国際的にそのプログラムを展開しているSGIの姿が、もっとバランスのとれた形で、そしてまちがいに曖昧さがなく正確に伝えられようということであった。

ふたつ目の出来事も似てはいるが、たぶんもっと劇的でした。インドに着くとまもなく、数人の人がわたしの、SGIと池田会長を扱ったイギリス放送協会の映画を見たかと訊ねた。見てはいなかったが、インド南部のバンガロールでその機会が訪れ、それから少なくともさらに三度、わたしはひとつの映画を見ることができた。そこには深刻な欠陥があり、ひどく不快なものであ

ると思った。この映画は数カ月間にわたり、インドで繰り返し放映され、飛行機の中でも英国航空が放映していた。この映画のはじまりの部分では、悪名高いオウム・カルト教団の、病理学的に危険な指導者が行った犯罪的活動の数々が、手短かに概観されていた。このカルトの会員は、東京の地下鉄に毒をまき、彼らの宗教の名のもとでその他のテロ行為に関与していた。その後でこの映画は、その時間の大部分を、SGIと池田会長を紹介することにあてていた。この映画は、画一的で否定的な結論を出すことは必ずしもできず、SGIとその指導部の仕事を、両面価値的に評価して終わっていた。この映画でSGIが、もうひとつのオウム・カルト教団であると示唆されていたわけではないが、傷はつけられていた。つまり、情報を与えられていない人が見れば——そして、その映画を見る実質的に全ての人は、情報が与えられていない——、このふたつの宗教教団が、同一であるとはいわれないまでも、類似のものである、そう容易に結論づけることであろう。そこでわたしは、自らの調査に、新たな熱意を抱いた次第である。すなわち、わたしがこれ

までに出会ったSGIが、例の雑誌記事とこの映画が暗示している特性のようなものをもつか否か、それを自分で確かめようということであった。わたしは、欲しいものは何でも思うままに見つけることができたし、わたしはSGIをめぐる事実を探究している間、協力が不十分であったことは一度もない。

3

海外の訪問から帰国し、その訪問をめくり数カ月反省した。そしてはじめてわたしは、自分の考えが、自らを驚かせる所見に戻っていることに気づいた。それは過激なもので、ひょっとして全く不適切であるかも知れない。たぶん単純に誤りであるかとも思う。しかしその所見には、ある深刻な問題を、価値ある形で吟味させてくれる可能性がある。その問題とはこうだ。SGIは真に多国籍の宗教組織であるのか、それとも日本の一宗教で、多様な土地に自らを輸出しているもの、たとえばソニー、富士、そしてホンダに匹敵するものであるのか、そのどちらかだということ。次のように示唆する人がいた。つ

まり、名前を変えるべきだと。それは現在の名が、生まれた国の外では、何も伝えることがないからという。その名は解釈が必要であり、たちまち焦点が、それが日本的であることになってしまふのだ。彼が提案した名は「国際仏教連合」(インターナショナル・ブデリスト・アソシエーション)であった。名前の問題は、いろいろな国の組織の間で議論すればいい。そうすれば生産的になろう。そのようなことをしても、いかなる損害も生じることはないであろう。良い結果がもたらされるとすれば、それは百以上の諸国にある多くのSGIの集団が、日本の中心となる事務局の監督によって支配されているのではなく、励まされている真に国際的な運動団体に所属しているという意識を増大させることとなる。

インタビューをした人々に、わたしが執拗に意見を求めたことがある。それは、その国の組織、そして日本におけるその本部と指導層との関係をどう思うか、ということであった。そうしたのは、自分の好奇心を満たすためでもあり、またSGIに関する顕著に否定的な世評があったからでもあった。その国の運動団体が、日本の

本部から、明示的であれ暗示的であれ監督されている、と示唆されたことは、一度もなかった。感謝はしばしば表明されていて、それは日本以外の国々のいろいろなセンターが、東京に拠点をもつ職員、とりわけ池田会長から受ける激励に対するものである。とはいえ、決まっただけで、自分がSGIに参加しているのは、完全に自発的であり、自分で選んだことだとしていた。

SGIが実質的に、一連の日本の複製生物(クローン)であるとする考えは滑稽である、そう彼らはいった。その会員たちが、自らの組織を明確に自らの国のものである、土地固有のものであると考えていることは、疑問の余地なくはつきりとしている。それは、わたしが訪問したセンターのいくつかの現在の指導層に、運よく日本人会員がいるところについてもいえるのである。従来、日本人の会員と指導者が、各国の組織を構築し作り上げる重大な時期に、その経験と才能とを提供することはきわめて重要なことであった。そうしたからこそ、日本人会員と指導者は、尊敬され高く評価されているのである。

日本人指導層は、日本における経験と技能を、その土

地の文化と一体化せんとする関心に、効果的に結びついている。今、その実例をひとつあげるとなると、それはアカシ・オオウチ博士(東洋哲学研究所インド・センター所長)の例となる。博士はもと日本人であったが、国籍をとってインド市民になり、もう幾年もたつ。氏は大学生としてインドに渡り、ネルー大学で博士号を取得し、その後もインドにとどまった。建築家としての仕事をこなす一方、彼はまたその才能をもって、インド創価学会、つまりニューデリーの創価学会支部の建設に貢献したのである。彼が生涯にわたりインドに——彼はインド市民となった——深く傾倒したこと、そしてその文化的・宗教的伝統に傾倒したことは疑いがない。彼は、日本生まれの者としての生得権の身分を保持している。インドにおけるSGIの次の世代の指導層は、インド生まれの者となる可能性が高い一方で、オオウチ博士は日本とインドの間の生きた架け橋として、他に類を見ない役割を見事に果たしている。

SGIが真に国際的になるには、いろいろな国におけるその指導層は、完全にその土地の者に、あるいはオオ

ウチ博士の事例のように、その土地の指導層とその土地の表現形態を發展させることに傾倒するように、おそらくなつていくことであろう。わたしは、訪問した全てのセンターで、会員が日蓮大聖人の仏法を、その仲間の国民に馴染みのある用語と行動で表現する務めに献身しているのを発見した。SGIの将来はまさに、次のような努力が成功するかどうかにかかっているのだ。つまり、SGIが一体化でき、その基盤の上に立つことのできるその土地の文化の価値観と実践活動は何か、それを決定する努力である。たとえばSGIの会員は、いくつかの国で、自らの独得のアイデンティティを保持するだけでなく、いわば文化の批評家になるという任務を帯びている。彼らは戦略家になり、どの文化的伝統がSGIの目標と両立するか、そしてその目標の範囲内で効果的に働きうるかを決定しなくてはならない。また彼らは戦術家になって、この仏教的伝統の特徴的な教義が、どのようにしたら有効に表現できるかを決定しなくてはならない。これはどの個人にせよ組織にせよ、きわめて困難な務めであり、前進は、必然的に遅々としたものになる可

能性がある。現段階で、日本以外のほとんどのSGIのセンターは、たいへん若く、区別のあるアイデンティティを確立する任務にどう接近するか、その方途を見つけてる企ては、その緒についたばかりである。その一方で、それぞれの土地の文化の主流の一部として、影響力をもつようになると、根本的な努力をしている。

4

もし現在のSGIが、日蓮仏教の、今や切り離された歴史に残る故郷を期待するということになれば、自らが抱える目下の責任と将来の責任に直面するのに、十分な準備態勢ができているとはとてもいえない。そうなれば、SGIが目にするのは、伝統墨守で権威主義的な世間と交渉を断つたモデルとなる。このモデルは、昔からの様式を、断固として保持すると主張してやまないものだ。幸運なことに、現実には国際的なSGIの各センターは、旧来のパターンにとらわれる必要がなく、その代わりに池田会長が提供したモデルを熟視できる。活動が、各文化にとつてきわめて重大な諸問題に関係する場合であつ

ても、その問題のいずれをも超越する活動を、池田会長は執拗に促進してやまない。SGIが、将来、確固不拔の成功を望むことができるとすれば、これこそがその根拠となる。

一例をあげる。池田会長は世界中を不断に巡り、教育者、実業界の指導者と社会の指導者、国家元首、政治家、そしてあらゆる宗教的指導者と会っている。このことにより池田会長は、次の考えを効果的に打ち砕いているのだ。つまり、自分たちのどちらかといえば秘儀的なことを行い満足している、一連の自己満足の小宗教集団、あるいは哲学的な議論集団にSGIが後退しようという考えである。SGIはそうあつてはならず、思考・ことば・行為の点で、全ての他の者が、啓蒙（悟り）のメッセージと機会を受け取るまで満足することはない菩薩の理念を、実現するよう要請されているのである。これまでに訪問したセンター全てにおいてわたしが目にしたもの、それはSGI東京本部からもたらされた、こうした行動主義的な指導モデルに対する賛辞だけであつた。

SGIが真に国際的な運動団体として将来どうなるの

か、それは余りにも大きな話題であるので、正確に決めるというわけにはいかない。しかし、今の時点でもはっきりしていることは、会員に次のことを実現する能力があるかどうか、その将来がおおいかかっているということである。つまり、自らの固有のアイデンティティを十分に表現し、同時に、主流の文化と十分な一体感をもち、そこに意義ある貢献をする能力である。たとえば、イタリアの多数の学者にインタビューをしてわかったことであるが、彼らの私心のない観点から判断すると、SGIは、事実、この途方もない任務において前進しているというのである。

イタリアのトリノ在住の著名なローマ・カトリック教徒の学者、マースシマ・イントロヴィグネ教授はわたしとの話の中で、こう所見を述べられた。つまり、イタリアにおける創価学会運動団体を分析したところ、その会員層は、イタリア社会の広範な横断面と見分けがつかないという結論に達したという。この会員層は、イタリア人一般に馴染みがあり、受け入れることのできる価値観を共有し、表現していた。もちろん、明確に区別しう

点もある。それは、この層の人々が、聖職者の權威と日本起源ということよりもむしろ、個々の確信が第一であると強調している点であった。数的にいえば、イタリアの五万人の信徒（そのうちおよそ二万七千人がSGIの会員である）は、何百万人のイタリア人の間で、統計的にいって顕著な集団とはなっているわけではない。ピエモンテのSGIの指導者のひとり、ニオ・ラ・ピアナは次の意見を述べた。つまり、こうした現状である限りSGIは、ローマ・カトリック当局の間に、たいした否定的な反応を引き起こすことはないであろうが、もし仏教の思想と実践とが、イタリア人の生活でかなりの勢力になれば、間違いなく否定的な反応が現れるであろうと。まさにこの理由から、イタリアのSGI集団の間には、政治的野心があると見られたいという姿勢がある。日本で、創価学会が長いことひとつの政党と結びついてきた歴史がある一方、イタリアでは、政治的な職につきたいと願っているSGIの会員は、自分とSGIとを一体化して考えることのないように指導されている。文化交流の問題に関する限り、いろいろな国のSGI集団が、

政治的結びつきから自由になっていることは、賢明なやり方のように見えることであろう。

5

創価学会の運動を国際的に確立する際、芸術を介することによって、達成方法のいちばん有効なもののひとつが提供されることは間違いない。わたしが訪問したのは、インド、イタリア、イングランド、メキシコ、日本、そして合衆国のセンターであったが、その訪問で明らかにしたこととは、異なる言語と文化の障壁を越え、共通の関心を表現する方法として、芸術が重要であるということだ。たとえばインドのバンガロール文化センターは、子供たちの美術の展示会を開催し、全市と地域からたいへん肯定的な注目を集めた。そこに展示されていた作品は、日本からもたらされたものだけでなく、バンガロール市全体の、広範にわたる多様な宗教的伝統をも子供たちのものでもあった。イタリア、メキシコそしてイングランドで、社会問題に関する傑出した展示会が行われ、SGIの哲学が、SGIのコミュニティ・センターの外

に十分に拡大されてきている。

イタリアのトリノのSGIは、多分野にわたる芸術のフェスティバルを行った。この催しは、満員の群衆から、きわめて熱狂的に受け入れられるものであった。芸術を介して、SGIの価値観を成功裡に伝えた例を、同じように引き合いに出すことができる。そうした企画は、宗教的・政治的・国家的境界を越えて直接訴えかける力をもっており、そこから生み出される親善は計り知れないものである。

文化的企画を強調する姿勢に共感できない人から、ときどき次のような意見を耳にすることがある。そうした人は「こうしたことが、仏教と何か関係があるのか」という。答ははっきりしている。生に向けて仏教がとる接近姿勢の根底には、驚異と歓喜の経験が横たわっている。それを表現するためにことばを選ぶよりも、むしろ強力ではあるが、はかない美的な物、つまり花を選んだ弟子を、褒め称えたのは、釈迦自身ではなかったのか。

SGI内部で芸術的表現が中心的役割を担うことが、このように特徴的に強調されているわけであるが、その

姿勢は次の例を見れば明かになる。つまり、東京郊外の創価大学の講堂を飾るのはたいへん卓越した彫像であるが、その彫像がいかに選択されているかだ。そこを訪れると、ヴィクトル・ユーゴーとレオ・トルストイのふたりの記念碑的彫像が迎えてくれる。これを辿ると、一段と大きなもうひとつの彫像に行き着く。アメリカの詩人ウォルト・ホイットマンだ。創価学会の創始者と指導者、たとえば戸田城聖、牧口常三郎、そして池田大作の彫像を期待してもおかしくないところに、そうした人物の像ではなく、フランス・ロシア・アメリカの作家たちがいる。彼らに共通することは、全人類に向けて深く人道主義的に同情を示したことであった。仏教的原理に基礎をおく大学を飾るのに、こうした人物を選択する。そこに反映している精神こそは、国際的地位を獲得しつつある組織の未来にとって、よい前兆となっている。

6

わたしは、イギリスSGIの指導者ロバート・サミュエルズと幾度か議論を行ったが、その中で、SGIの価

値観の象徴としてこうした人物を選択する姿勢、それを導いた精神を、わたしは賛嘆しているといった。この人物たちは人道主義的ではあるが、非仏教的である。わたしのSGI研究全体を通じて決して解消することのなかった問いを、わたしは彼とともに出した。これは、物質(肉)的欲望と精神(霊)的欲望の関係に関わる問いである。ときどきSGIは、明らかに「現世(この世)的」であることで批判されている。つまり、実際の利益、そして物欲と願望に向けた関心ゆえに、批判されているのだ。わたしは、次のように詩の形式めいたもので、その問いを彼に投げかけた――

身体

つまり、精神にとっての露が、

わたしにこう訊ねる

何故、この露はそれほど憧れの対象となるのか

この問いをふたり共通のものとした数日後、わたしはサミュエルズ氏から答えを受け取った。そこには、真の

仏教に対する卓越した洞察が見られ、真に国際的になるために、SGIがとるべきもうひとつ別の方が提供されているものである、そうわたしは信じている。彼は次のように書いていた――

身体(肉)と精神(霊)はひとつであるので

身体の憧れは

精神の憧れである

基礎となるのは普遍的な、あるいはもっと大きな

我、

つまり人間の同情(慈悲)――愛という人もいよう

英知、勇気の塔である

塔であるので、

その憧れは、因そのものとなる

啓蒙(悟り)の。

サミュエルズ氏は、仏教の中心的な確信を効果的に表

現している。つまり、魂と肉体の分離は存在しない、ということだ。そして彼の詩は、われわれが自らを正しく理解すれば、自らが仏であることがわかることを明らかにしている。われわれの生がいちばん深く憧れるのは、愛・英知・勇気に対してである。これを理解することは、啓蒙された(悟った)ことに他ならない。

わたしの最初の結論はこうだ。各国のSGI組織は、会員を引き寄せ保つことに成功しつつあり、この会員は、日蓮仏教哲学を修学し、表現することに真摯に傾倒しているということである。わたしが訪問した全てのSGIの組織の会員の間には、熱意、知性、感性、批判的洞察が見受けられたが、それはどの組織にも、幸運にもある、と見なされるであろう。おまけにわたしは、会員と指導者たちが仏教的価値観を、そうした価値観とは全く異質の、もしくは無関心な、あるいは積極的に反対しさえする社会で、効果的に表現する自らの力について、現実主義的姿勢をとっていることを知った。わたしが問題だと認識したことは、あまりよく認められてはいないものであった。その問題とは、矛盾するふたつの要求に関わる

もので、日本の外にいるSGIの会員と集団は、それに直面している。一方においてこうした要求は、日蓮大聖人の教えに忠実になろうとする要求であり、他方においては、その土地の文化で支配的な信仰諸共同体に見られる、共通の価値観と教えの領域を明らかにせんとするものである。次のふたつの姿勢のどちらかに、心引きつけられる。つまり、重要な差異を余りにも強力に主張するために、支配的な、あるいは優位を占めている社会を疎外する危険を犯してしまうこと、あるいは本質的差異をもっともらしい紛らし、実質的に水で薄めてしまうことである。明確な区別立てを強調しなければ、この問題は、何故それほど新しい、明らかに外国の哲学であり宗教であるものに思い悩まなくてはならないのだ、と問うことになる。それは、特に違ったものではないのだから。もし強調するということになれば、何らかの深刻な反対に直面する覚悟をしなくてはならない。

7

これまでの説明で意図したことを、この時点で、实例

をもって説明しておけば、たぶん有益となる。ひとつの例は、わたしが、イタリアで経験したこととなる。イタリアでわたしは会員たちと議論した。彼らは結局、宗教はどれもたいへんよく似ていて、全てが個人的・社会的救済という類似の目標に到達しようとしている、と信じていた。仏教とローマ・カトリシズムは全く矛盾しない。それは、どちらも個人の精神（霊性、社会正義、そして神との究極的合一）を促進するからという。イタリアではそういう会員がいたが、わたしの理解では、正しいと思える次のような指摘をする者もいた。つまり、カトリシズムと仏教には、きわめて深刻な区別立てがあり、それをいい紛らわしてしまうと、どちらの宗教にせよ、その会員を失いかねないことになる。このイタリアの支配的見解にとつて、巨大な困難であり途方もない難題であることはいうまでもないが、仏教徒が、今以上に彼ら自身の創始者たちに忠実になり、たぶんもっと効果的に、もっと多くの支持者を引きつけようとしたら、〈神〉の概念を再定義する必要がある、と主張しなくてはならない。仏教徒にとつての神的なものは、遍在するものに備

わる真の超越性を有している。〈神〉は具体化・外在化されることはないが、直覚力のある各存在の内部の、真理・美・善に向けて個人を導く動的な現前として経験される。宗教的・哲学的問題の最終的拠り所は人の自我である、とずばり断言する姿勢、それは仏教徒が保持し、そして彼らが可能な限り明確に表現すべき真の区別立てである。そうするために必要とするのは、まずはじめに、実践者自身がきわめて真剣に、そして長期にわたり教育的努力をすることであり、次いで非仏教徒と適切な対話を準備するためにそうした努力をすることである。幸運なことに、わたしが訪問した団体の指導層は、強力にこの分野に傾倒している。

メキシコでSGIのひとりの女性会員が述べた意見を介して、次の事例がわたしの注意を引いた。これがふたつ目の例である。彼女によると、ときどき気になることがあるという。SGIの会員の中に、自分たちに慣れ親しんできたイエス、ヨセフ、マリアの像を、御本尊にやすやすと取り替え、そうしたキリスト教の偶像（イコン）に向かって祈るのと同じやり方で、御本尊に祈っている

者がいるという。少なくとも表面的には取り替えられても、それで個人の考え方に変化が起きるものなのか、と彼女は疑問に思っているのだ。この事例を持ち出せば、指導者の直面しなくてはならない諸問題とは何か、それがよくわかる。その指導者の務めは、十分に理解しやすい教育プログラムを作り、仏教の特性がいかなるものであるのを、正確に理解できるように促すことである。

8

SGIが、多くの国々で、個々の運動を展開するにつれて、中心的な疑問が解決されず残ってくる。つまり、展開をするためのモデルとして、どれが最善かということだ。いわば、どの歴史上の時期に、各国の新しい運動団体が目を向けることになるかということ。明白なモデルをあげるとすれば、それは日本のものとなる。日本でこそ、日蓮仏法の世俗的運動団体が、いちばん長い歴史をもち、いちばん数的に成功をおさめているからである。明らかに新しい運動団体は、その成功から利益をえ、その親の組織がこれまでに直面してきた全ての問題か

ら、いろいろ学ぶことはできる。しかし日本以外で、少なくともふたつの国の組織が、有益な実例を提示してくれていて、新しいSGIの集団を組織しようと思う者には参考にする価値がある。つまり、イギリスと合衆国の例だ。

アメリカの日蓮正宗（NSA）、現在はSGI・USAは、自己認識と使命意識の変化を経験したように見える。そしてその変化は、注目に価するものだ。こうした変化のいくつかを、わたし自身、直接的に目撃したことはあるが、ジェイン・ハーストが、その著書『日蓮仏法とアメリカの創価学会』の中で書いた詳細な分析から、わたしは恩恵を受けている。彼女の研究は、次の結論を下している。つまりアメリカのSGIは、いくつかの異なる局面を経験し、その最初のもの、合衆国の二百年祭と同時に行われた二百年祭大会において、最高潮に達した。彼女のことはによると、「それは、文化的イヴェントを提示し、人の大集団を動かすNSAの、組織能力の無上の業績であった」⁽¹⁾。それによって、NSAとアメリカの間に共通する価値観は何か突き止められ、彼ら自身の

「人間革命」を表現するために、熱烈的な修練の場が提供された。そして、ハーストのことはよれば、この運動団体が、いちばん熱狂的で若さに溢れ、強烈な形で自らを表現した、最後のものとなった。

この「国際文化祭」の雰囲気が目すべきものであったことを、わたしは確証できる。わたし自身、約一万人の参加者のひとりとなり、ハーストがNSAのエトスとして注目した三つのテーマが、眼前に劇的に繰り広げられたからである。つまり「個人の力、日蓮仏法の実践を介しての変革、そして世界平和を生み出す団結」⁽²⁾だ。この大集会の前面にある演台に座り、アメリカの建国の父たちの巨大な肖像が、地味な色で提示されるのを見たことは、忘れることのできない経験であった。その肖像の中のひとつに池田会長の肖像があり、似てはいたが生気溢れる色で描かれていた。SGIの会員にとって、その肖像を含めることは、不釣り合いとは思えないであろうが、新来の者が、これをどのように理解するかと思ってもよかった。そのような人々にとっては、それは不可解で、やや動揺を与える挑戦であった可能性はある。それ

はまるで議論が提示される前に、結論に達してしまったかのようなのである。

9

イタリア、イングランド、メキシコ、そしてインドのSGIの指導者と会談をして、わたしは次のように信じるようになった。つまり彼らは、自らの国の価値観と、彼らの運動団体が保持している価値観との間で、何が共通するものであるのかを突き止めること、それがいかに重要なことであるかを理解しているが、この共通するものの提示様式に関して用心したいと思っている。SGIの組織を研究して、わたしが達したきわめて肯定的な結論と同様に、いちばん重要な結論のひとつはこうである。すなわちその指導層は、SGIの宣伝方法を大いに自意識をもって選択し、それぞれの社会との間で、非生産的で意図とは違う難問と議論を引き起こさないように、とりわけ注意を払っている。

な変化をとげ、その後では「方向が、はるかに具体的に集団から離れ、個人の生活の方向へと向かった」⁽³⁾。より規模の大きな社会的、そして政治的ですからある目標は、個人の発展に従属するものとなった。ハーストが言及していることであるが、NSAのエトスが、どのようにしてその会員に影響を及ぼしているか、それを統計的に立証可能な何らかの形で答えることは不可能である。「変化したのは、会員の生活という観察できる事実ではない。むしろ、主観的に経験されたNSAのエトスが、NSAの会員の生活に内的一貫性を与え、それによって彼らの日常活動に究極的な意義が付与されたのである」⁽⁴⁾。たとえば合衆国のNSAは、もとは、きつちりとした階層的構造を備える、とりわけ日本的な運動団体であった。この合衆国ですらNSAは、今では、アメリカ人指導層を備えるひとつの運動団体となり、ひとつの確立した宗教に発展しつつある。NSAが初期に抱いていた希望は、合衆国を劇的にNSAに改宗させることであり、それは仏教によって託されていたように見える。ところがこの希望が、個人の精神(霊)的实践活動を教化すること、そ

してアメリカ文化内で仏教的価値観を達成するための辛抱強い努力へと変化したのである。合衆国のNSAが見せた第二の局面は、平和・文化・教育を促進するという方向である。「一層穏健で、漸進的な個人主義的アプローチが、成功をおさめたのだ」⁽⁵⁾。

今、わたしにはこう思える。わたしの訪問したSGI共同体の指導者たちは、アメリカの経験における第一の局面ではなく、第二の局面を基礎に建設しようと決意している。彼らの選択は賢明であると、わたしは思う。なぜなら、そうすることによって、確固とした成果を上げるための、より強力で長続きのする基礎が、究極的には可能になるからである。壮観なイヴェントを行えば大量の人々が巻き込まれ、一時的ではあってもかなりの宣伝効果をあげることができる。しかし、このイヴェントよりは劇的でないが、自らの活動に打ち込んだ土地の組織が、協力的な企てを行い、非SGIの機関と相互に影響しあって発展していくことにより、今まで以上に長続きのする利益がもたらされる可能性がある。このように述べたからといって、広範にわたる方法で会員の才能を

有効利用する、素晴らしい文化的プログラム、たとえばイタリアのピエモンテのSGIが最近示したようなものが、価値がないといっているわけではないのだ。なぜならそれによって、会員自らと一般大衆に向けて、SGIの会員の質と能力とが見事に証明されるからである。とはいえ、結局、社会全体に影響する社会問題や、さらに地球規模の関心事を扱う展示会のような、多文化的・多信仰のイベントによってこそ、SGIとその使命に対する理解が、より一層永続性をもち、深まりを見せることになる。

イギリスのSGIとの接触は、イタリアやインドの場合よりも、その広がりには狭いものではあったが、わたしは幸運であった。オックスフォード大学教授のブライアン・ウィルソンを含む多数の個人だけでなく、SGIの指導層と集中的に議論することができたのである。ブライアン・ウィルソン教授は、イギリスにおけるSGIを扱った広範な研究書『タイム・トゥ・チャント』（唱題の時―カレル・ドベレアリと共著）を著されている。この著作からだけでなく、彼らからもわたしが受けた明確な

印象は、ひとつの宗教運動団体が、現代社会、そしておむね世俗的なキリスト教以後の社会で、自らが追求すべき目標を明確化し、そしてそれを達成するためのいかなる効果的な手段を発見しようと、注意深く研究しているというものであった。多くの人々から拒絶されてはいないとしても、深刻にむしばまれている伝統と価値観に基づく制度――たとえば、君主制と既成の教会――を有する社会であるイギリスは、SGIにとって格好の機会と難題を提供しているのである。

二十年前に行われた研究の中でウィルソン教授は、新しい宗教運動団体は、新しい宗教的文化の基礎として、永続するものは提供できないと結論づけた。「そうした団体が成長し、訴える力をひと時ももち、そして朽ちる。さらにまた、別の熱狂姿勢にとって代わられるという経過は、わたしには、新技術と次第に合理的になっていく手順とが、人間の社会的経験を支配している世界にあって、人間の精神が経験する試練を証すもののように見える」⁽⁶⁾。この研究の後でウィルソン教授は、池田SGI会長と会談した。そして明らかになってきた国際的強調を

反映したふたりの対談は、『社会と宗教』（上下）として公刊された。もともと最近になって、ウィルソン教授とドベレアリが行った権威ある分析は、イギリスの若者の関心と理解力が、どのようにSGIが推進している価値観と容易に重なるかを詳述している。彼らはこう記す――「十三世紀の経典に二十世紀の今日性が与えられると、その聖なる祈りが見せる神秘は、容易に、日常生活の実用主義を収容してしまう」⁽⁷⁾。わたしは、SGI・UKの現在の指導者と会員と議論して、この結論は十分に正しいものと、判断している。

10

SGIの価値観を普及させるためのひとつのモデルをあげると、それは牧口常三郎の教育理論が実践される学校を發展させることとなる。偏狭な、あるいは公共的な学校の標準的カリキュラムに代わるものがあれば、多くの国で大いに肯定的な反応を受けることは十分に考えられる。池田会長が創立した、初等レヴェルから大学院レヴェルまでの創価学園は、何がなしえるかを示す有益な

実例をすでに提供してくれている。おおまかにいえば人道主義的であるアプローチの仕方は、多くの者から歓迎されるであろうし、SGIの支持者を拡大することになる。そうした学校は、名声と表現を提供するだけでなく、ついでにいうわけではないが、財政的にも自活するものとなる。

もしSGIの指導者が努力の幾分かでも傾注し、次の行動に出るとしたら、それは積極的な一歩となる。すなわち、適切な資料を準備し、そしてSGIの哲学と特定社会の支配的な哲学が、どのように違っているかだけでなく、いかなる共通の価値観の領域があるかを、非SGIの友人と議論する方法を、会員に向けて示すことである。（神）と呼ばれる地球外の権威的男性を提示してきた伝統を、仏教の立場から拒絶する姿勢、それをぶしつけに宣言するのではなく、その代わりにSGIの会員は、その標準的な見解を受け入れているにせよ拒絶しているにせよ、それに不満を抱いている伝統主義者と討議することは可能であろう。伝統的な立場に関して、深刻な挫折感を経験している非SGIの人間に対して、こ

う忠告を与えることができよう。つまりたぶん問題は、彼または彼女が信仰心を欠いているということ、あるいは彼または彼女が権威に従順でないということであるよりはむしろ、聖なるものを不連な形で「位置づけている」ことだ、つまりイメージ（形象）の問題なのであると。たとえば、ユダヤ教とキリスト教の歴史的展開を見ると、聖なるものが、前進的に信仰者の心へと位置づけ直されていく経過がわかる、そう仏教徒が指摘するとき、明らかにすることは、この支配的な宗教と仏教に関して、密接な類似の領域が存在しているということなのである。

多くのSGI会員がわたしに向かつて、「仏教徒であるわたしは、〈神〉を信じていない」といった。しかしそのようにいったのでは、当然のことながら信仰者は刺激を受け、場合によっては反感を抱き、この問題点が正当な扱いをうけなくなろう。そうした対決姿勢をとることによって、閉ざされていた扉が開く場合もあれば、しっかりと閉ざされたままの場合もある。だから、いうべきことは、こうであるとなしには見える。つまり、非仏教的な伝統的宗教が提供してきた洞察に一致させてい

えば、わたしは仏教徒として、〈神〉ということばで意味されているものが、わたしの心の内部にあることがわかる。キリスト教の教義である〈受肉化〉を持ち出せば、それによって聖なるものの人間化が補足され、それで実りある互いに尊敬しあつた対話が行える機会が生じると提案してもよい。明かなことであるが、非仏教徒集団と非対決的な対話を積極的に展開することは、世界中のSGIのセンターが、それぞれの文脈の中でよりよく知られ、そして強力になっていくための、重要な方途であるのだ。

インド、イタリア、イギリス、メキシコ、そして合衆国にあるSGIのセンターを訪問して、わたしが発見したことの全ては、ウイルソン教授とドベレアリ教授が、その共著『タイム・トゥ・チャント』の結論で書いていることを確認するものであつた――

人格神の威信が衰退してしまったこと、崇拜をめぐる伝統的で公式的な宗教概念が何かにとつて代わられたという意識、信仰と実践活動は私的なものだといふこ

とが強調される事態――この全てが、従来よりも公式的でなく、制度化されていない信仰の型に至る道を切り開いている⁽⁸⁾。

創価学会インタナショナルは、きわめて幸運な運動団体であるという印象を、わたしはもっている。そこには、宗教的献身と文化の豊かな遺産があり、そしてそれは古い仏教的伝統に深く根ざしている。SGIには、その伝統に縛る絆からの自由があり、献身的な指導者の指導力が発揮されている。この指導者たちは、平和のうちに生活を送ること、そして人道主義的な価値観の教化に身を捧げた、啓蒙された（悟りを開いた）人間の抱いた展望を、蘇らせている。わたしはSGIが、その名の意味していることを実現する道を、十分に辿っている運動団体であると考えている。なぜならSGIは、永続的な組織をいくつも、国際的に構築しているからだ。

- Gakki in America (New York: Garland Publishing Inc., 1992), p. 268
- (2) *Ibid.*, p. 268
 - (3) *Ibid.*, p. 274
 - (4) *Ibid.*, p. 279
 - (5) *Ibid.*, p. 283
 - (6) Bryan R. Wilson, *Contemporary Transformations of Religion* (Oxford: Oxford University Press, 1976), p. 101
 - (7) *Ibid.*, p. 231
 - (8) *Ibid.*, p. 231

(ハワード・ハンター、タフツ大学宗教学部長)
(あらきまさすみ・筑波大学教授)

註

(一) Jane Hurst, *Nichiren Shoshu Buddhism and the Soka*